

# 近年発生が確認された緑化樹木のうどんこ病

東京都農業試験場 堀 江 博 道  
富山県立大学短期大学部 佐 藤 幸 生

## はじめに

緑化樹木は緑地帯や生垣などに植栽される樹木の総称である。自然植生の樹木と異なり、一般には大量の単一樹種が密に植栽される。したがって、ひとたび病気が発生すると伝染が早く、しばしば大きな被害となる。代表的な例がトウカエデに発生した首垂細菌病とうどんこ病である。1980年代に入り、トウカエデの街路樹に幻の病気と考えられていた首垂細菌病が、東京、大阪など全国規模で大発生した。本病は春季に新梢の萎凋や落葉、枝枯れが顕著であったため、マスコミにも大きく取り上げられた。同時に発生したのがうどんこ病であった(堀江・菅田, 1985)。この時点まで、我が国ではトウカエデにうどんこ病の記録は認められていなかった。首垂細菌病の方は数年を経て、自然に衰えを見せ、現在では一部で発生するものの、行政的問題となるような被害とはなっていない。一方、うどんこ病はすっかり定着してしまい、各地のトウカエデ街路樹で、4月下旬頃に新梢の先端葉から発病が始まる。本病は、うどんこ病特有の白色粉状の標徴を示すほかに、葉と新梢に激しく発生した場合には枝葉の罹病組織が脱水してバリバリになり、景観を著しく損なう。また、豊富な分生子を形成するために、通行人の服を汚すことがあり、行政に対して苦情が寄せられる。本病は、街路樹で、薬剤散布による防除を行う唯一の病気といってよい。

緑化樹木のうどんこ病については、大野(1975)による総説が、本誌に掲載されている。本稿では、最近報告されたうどんこ病、今後の課題などについて紹介する。

## I 緑化樹木うどんこ病の記録

日本植物病名目録(日本植物病理学会, 2000; 以下、「病名目録」と表記する)に、うどんこ病が採録された樹種を表-1に示す。病名目録には針葉樹は10科50種類があげられているが、いずれにもうどんこ病は記録されていない。広葉樹は99科432種類のうち、52科123種類にうどんこ病が登載されている。しかし、1990年

代にはわずかにウリノキうどんこ病およびオオバアサガラ裏うどんこ病の2種類のみが新たに追加された。一方、病原菌の追加および所属の変更は広範囲に及んでいる。すなわち、病名目録旧版で採用されていたHOMMA(1937)の学名は大幅に修正され、新版ではBRAUN(1987)、大谷(1988)、野村(1997)らのモノグラフに準拠している。

## II 最近、問題となっているうどんこ病

病名目録に未採録のうどんこ病のうち、近年、主要な緑化樹木に発生した種類について、東京都の事例を中心に解説する。

### 1 スズカケノキ類うどんこ病

スズカケノキ類(プラタナス; 主にモミジバスズカケノキ)は幹線道路の街路樹として利用されており、東京都では街路樹植栽本数41,141本で、イチヨウ、ハナミズキに次いで第3位、全街路樹数の8.9%を占める(2000年4月現在)。スズカケノキ類にはうどんこ病は記録されていなかったが、1997年秋季に本病が全般的に大発生した(堀江ら, 1999)。

#### (1) 発生状況

本病は6月下旬から発生し、梅雨明けから樹全体に拡がる。初め新梢先端葉が展葉中に発病することが多く、白色、粉状の菌叢が厚く生じる。この場合は発病部位が正常に生育できずに、葉脈が変形し、葉が歪んだ形となり、縮れや波打ちを伴う奇形を起こす。若い葉では菌叢が葉裏面に先に発生すると、葉表には菌叢の発達が少ない。罹病部の表面がしばしば黄化する。奇形葉の厚い菌叢が枝全体の葉に拡がることは少ない。一方、展葉後に発病すると波打ちや奇形は目立たないことが多く、薄い菌叢が全面に生じ、白く汚れたように見える。薄い菌叢はしばしば樹全体にまん延する。病葉は長く着生しているが、秋季の葉の黄化は鮮明ではなく、また、落葉は正常葉より早い。本病は症状が激しく、景観を著しく損なうため、スズカケノキ類の重要病害といえる。

東京都における本病の発生状況について、1997年11月上中旬に区部(9区)18地点、多摩地区(5市)10地点、合計28地点のスズカケノキ類街路樹、各平均26株を調査した。株ごとに無発病～甚発病の6段階に区分

Powdery Mildew of Ornamental Woody Plants in Japan.

By Hiromichi HORIE and Yukio SATO

(キーワード: 緑化樹木, うどんこ病, 新病害)